

# 内集団表象と外集団表象が 社会的自己概念をどのように規定しているのか

—— Stroop Effect Technique を適用した検証 ——<sup>1</sup>

潮村公弘<sup>2</sup>・上田勝弘<sup>3</sup>

キーワード：認知表象，反応時間，最小集団実験，ストループ効果，内集団

## How In-Group and Out-Group Representations Prescribe Social Self-Concept : An Investigation by the Application of the Stroop Effect Technique

Kimihiko SHIOMURA (Faculty of Arts, Shinshu University)

Katsuhiko UEDA (Graduate School of Letters, Kobe University)

### 問 題

社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) は、集団に所属することで起こる自己概念の顕在性 (salience) が変化することにより、集団行動が生起するとした。自己概念の顕在性がどのような機構で変化するかを検討することは、集団行動の研究にとって重要な課題といえる (Turner & Onorato, 1999)。自己概念の顕在性が変化する機構について3つの主要なモデル、すなわち depersonalization (脱個人化) (Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell, 1987), optimal distinctiveness model (最適な弁別性モデル) (Brewer, 1991), egocentric social categorization model (自己中心的な社会的カテゴリー化モデル) (Simon, 1993) がある。これまで行われてきた研究の多くは、報酬の分配や評価といった行動指標を用いてきたために、自己の認知表象を想定しているこれらのモデルを検討する十分な妥当性がないと言えよう (cf. Smith & Henry, 1996)。本研究の目的は、depersonalization (Turner, et al., 1987), optimal distinctiveness model (Brewer, 1991), egocentric social categorization model (Simon, 1993) の各モデルが、集団に所属することによって起こる自己概念の顕在性の変化を適切に説明しているのかについて、自己の認知表象という

<sup>1</sup> 本論文は、上田が執筆した信州大学人文学部卒業論文 (平成11年度) をもとにして改稿したものであり、潮村が卒業論文および本論文の研究・改稿指導にあたった。したがって上田を第一著者にすべき性質のものであるが、信州大学人文科学論集の投稿規定にもとづき、潮村を第一著者、上田を第二著者とした。

<sup>2</sup> 信州大学人文学部

<sup>3</sup> 神戸大学大学院文学研究科

観点から再検討することである。本研究のこの基本的な目的は、Smith & Henry (1996) と共通のものであるけれども、われわれは、彼らの研究が抱えていたいくつかの問題点を解消した上で検討をおこなった。社会的アイデンティティ理論は、自己概念に関する特徴的なモデルを有している。この理論は、自己概念が個人的アイデンティティ (personal identity) と社会的アイデンティティ (social identity) の二つの下位体系から成立しているとする。Tajfel & Turner (1979) は、所与の社会的状況にしたがって各アイデンティティが自己概念に顕在化することで、行動内容が決定されるとした。個人的アイデンティティとは、個人的な人間関係と結びついた自己の認知表象である。一方で、社会的アイデンティティとは、集団やカテゴリーから派生する自己の認知表象である (Hogg & Abrams, 1988)。心的表象とは、個人がある対象から想起する性格特性を意味している。例えば、兵士に対して「忠誠をつくす、たくましい、攻撃的」といった性格特性を想起するならば、その性格特性が兵士に対して有した認知表象を示す。本研究では、自分自身に対して想起する性格特性を「自己表象」、内集団カテゴリーに対して想起する性格特性を「内集団表象」、そして外集団カテゴリーに対して想起する性格特性を「外集団表象」と呼ぶ。

また、社会的アイデンティティ理論を発展させた自己カテゴリー化理論 (Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell, 1987) でも、集団行動を引き起こす原因として認知表象に大きな役割を与えている。彼らは、自分自身や他者を認知するさいの認知的精緻化 (cognitive elaboration) として社会的アイデンティティを再定義化した (Turner et al., 1987 p. 42)。そして、自分自身を内集団カテゴリーの一部として知覚する自己カテゴリー化 (self-categorization) の結果、社会的アイデンティティを獲得するとした。自己カテゴリー化とは、社会に身をおいた個人がもつ、自己の認知表象の一形態である (Turner et al., 1987 p. 44)。以上より、自己の認知表象をできる限り直接的に測定する方法を用いて、個人的アイデンティティから社会的アイデンティティへと、自己概念の顕在性が変化する機構を検討することは適切なことである (Smith & Henry, 1996) と考えられよう。

集団に所属することで起こる自己概念の顕在性が変化する機構について、主要な3つのモデルが存在している。Turner et al. (1987) は自己カテゴリー化理論の中で、脱個人化というモデルを提唱している。彼らは、集団に所属している個人は、自分自身を個人差によって定義づけられた独自の人格と知覚するのではなく、内集団成員の一部として知覚するとした。すなわち、この脱個人化により、個人的アイデンティティから社会的アイデンティティへ自己概念の顕在性が変化するのを、自己表象が内集団表象の一部として知覚することと想定している。なお、3つのモデルのうち以下に記す2つのモデルは、自己カテゴリー化理論を基礎としているために、脱個人化過程をその一部に組み込んでいる。

Brewer (1991) は、optimal distinctiveness model で自己概念の顕在性が変化する機構として、集団に所属する個人の動機づけに注目した。彼女は、集団成員としての個人は「集団成員として自己と内集団成員性を同一視したい」という欲求と「集団内の個人として自己と内集団成員を区別したい」という欲求が均衡するアイデンティティのレベルを採用するように動機づけられるとした。すなわちこのモデルは、社会的アイデンティティへ自己概念の顕在性が変化するのを、内集団表象が自己表象の一部になることであると同時に、内集団表象と自己表象を差異化する働きであると想定している。

Simon (1993) は、egocentric social categorization model で、自己概念の顕在性が変化する機構として自己中心的な知覚に注目した。彼は、「自分自身か、もしくは、自分自身以外か」という自己中心的な二分法に基づいて人が知覚を行なう基本的な傾向に注目した。そして、集団に所属しているときは「われわれ自身か、もしくは、われわれ以外か」という知覚になるとした。さらに、自己概念の変化で自己中心的な知覚が顕著になるのは準集団間状況 (quasi-intergroup situation) であるとした。準集団間状況とは、内集団を集団よりもむしろ個人の集合として捉え、外集団のみが明確に集団として定義される状況である。そして、集団成員としての自己定義について考慮する状況が、準集団間状況 (quasi-intergroup situation) の一例であるとした。よって彼は、自己定義について考慮するときには、「われわれか、もしくは、われわれ以外か」という自己中心的な知覚が、自己概念の顕在性の変化を規定するとした。このモデルでは、社会的アイデンティティへ自己概念の顕在性が変化することは、内集団表象が自己表象の一部になることであり、かつ、自己表象と外集団表象を差異化することと想定している。

上述した3つのモデルでは、自己概念の顕在性が社会的アイデンティティへと変化するときに機能すると想定している機構が異なる。しかし、必ずしもこれらモデルの間に矛盾があるとは言えない。optimal distinctiveness model は動機づけを重視したモデルを、egocentric social categorization model は「自分自身か、もしくは、自分自身以外か」という自己中心的な知覚に着目したモデルを、ともに depersonalization を基礎とした上でそれを発展させたモデルとして呈示している。このように、それぞれのモデルは、自己概念の変化を規定する機構について異なる側面に主たる焦点をあてており、このことは、それぞれが独立したモデルであることを意味する。しかしこれらのモデルはいずれも、集団に所属することで引き起こされる、自己概念の顕在性が変化する機構について扱ったものである。したがって、自己の認知表象の測定が可能となる実験手法を用いることで、これらのモデルは比較可能となろう。

個人的アイデンティティから社会的アイデンティティへ、自己概念の顕在性が変化することは、集団行動を引き起こす基本的な心理過程であるにもかかわらず、この心理過程について実証的に取り組んだ研究は極めて少ない (cf. Brewer & Pickett, 1999)。その理由の一つとして、社会的アイデンティティ理論、もしくは自己カテゴリー化理論に取り組んでいる研究の多くは、報酬分配や評価などを従属変数としてきたことが挙げられる。このような従属変数を用いた実験結果を用いて自己概念の顕在性が変化することを推論するのは、「せいぜい間接的にしかすぎない」(Smith & Henry, 1996) と言えよう。

本研究が実験手法として依拠した Smith & Henry (1996) は、社会的アイデンティティが自己概念において顕在化する過程を、認知表象上での変化として検証することを可能にした。Smith & Henry (1996) に先駆けて、Aron et al. (1991) は、自己表象が変化する様式について、それまでの諸研究と比べてより直接的な知見を呈示できる「ストロープ効果を応用したテクニック (technique applying the stroop effect)」を考案した。Aron et al. (1991) は、親しい個人と対面したときには、自己表象が親しい個人に対して持つ表象から干渉を受けることを示した。そして Smith & Henry (1996) は、この「ストロープ効果を応用したテクニック」を発展させて、集団に所属する時に、自己表象がどのような様式で変

化するかを検討した。Smith & Henry (1996) では、はじめに、実験参加者が所属する学校社交クラブを示すことで集団カテゴリーが呈示された。次に被験者は、＜内集団＞（例えばキリスト教クラブ）、＜外集団＞（例えば政治クラブ）、そして＜自分自身＞の3つの対象に対して、それぞれ91の性格特性が「あてはまる」か「あてはまらない」かを、質問紙上で回答した。この課題後に被験者には、コンピュータ画面に呈示された性格特性語を見て、その性格特性が＜自分自身＞に「あてはまる」か「あてはまらない」かについて判断し、できるだけ速くキーを押すことが求められた。このテクニックでは、コンピュータ画面に呈示された性格特性が＜自分自身＞に「あてはまる」か「あてはまらない」かについて判断する反応時間が分析に用いられた。

その結果、＜内集団＞についての判断と＜自分自身＞についての判断が一貫している性格特性語（すなわち、＜内集団＞あてはまる・＜自分自身＞あてはまる、あるいは＜内集団＞あてはまらない・＜自分自身＞あてはまらないのいずれかに位置づけられた性格特性語）に対してその特性語が＜自分自身＞あてはまるか否かを判断するために要した反応時間は、＜内集団＞についての判断と＜自分自身＞についての判断が一貫していない性格特性語（＜内集団＞あてはまらない・＜自分自身＞あてはまる、あるいは＜内集団＞あてはまる・＜自分自身＞あてはまらないのいずれかに位置づけられた性格特性語）に対して同様の判断をするために要した時間よりも有意に短かったことが示された。その一方で、＜外集団＞と＜自分自身＞との関係性については、2つの対象集団に対する判断が一貫している性格特性語が一貫していない性格特性語かによって、反応時間に差異がみられなかった。

Smith & Henry (1996) によって示されたこれらの結果の含意を以下に示す。古典的なストループ課題の実験では、呈示された言葉のインクの色を回答するのに要する反応時間を測定する。例えば、印刷された言葉が「赤」であるなら、黒のインクの色を回答するときと比較して、緑のインクの色を回答する時には反応時間が長くなり、赤のインクの色を回答する時には反応時間が短くなる。この現象は、言葉の色と言葉が干渉してしまうために起こる（例えば嶋田, 1985）。「ストループ効果を応用したテクニック」（Aron et al., 1991; Smith & Henry, 1996）においては、コンピュータの画面に呈示される個々の性格特性が＜自分自身＞に「あてはまる」か「あてはまらない」かを回答するさいに要する反応時間を主たる従属変数とする。この時、コンピュータ課題に先だって質問紙形式で呈示される各性格特性語は、＜内集団＞に対して「あてはまる」特性か「あてはまらない」特性であるかが測定されていた。ここで、呈示される性格特性語の内、＜自分自身＞「あてはまる」・＜内集団＞「あてはまる」と回答された性格特性語と、＜自分自身＞「あてはまる」・＜内集団＞「あてはまらない」と回答された性格特性語に対する反応時間とに特に注目が向けられる。後者の特性語に対する反応時間に比して、前者の特性語に対する反応時間が有意に短いものであるならば、内集団表象が自己の認知表象に干渉をしていることをあらわしていると考えられる。その一方、両者の反応時間に差異がなかったならば、内集団表象は自己の認知表象に干渉していないことをあらわす。同様に、外集団表象の影響に関しては、＜自分自身＞「あてはまる」・＜外集団＞「あてはまらない」と回答された性格特性語と、＜自分自身＞「あてはまる」・＜外集団＞「あてはまる」と回答された性格特性語に対する反応時間とを比較した場合に、前者の特性語に対する反応時間が、後者の特性語に対する反応時間に比し

て有意に遅延したものであるならば、外集団表象が自己の認知表象に干渉していることをあらわしていると考えられる。その一方、両者の反応時間に差異がなかったならば、外集団表象は自己の認知表象に干渉していないことをあらわす。このように、「ストループ効果を応用したテクニック」は、集団に所属することで起こる自己概念の変化に対する内集団・外集団の影響を検討しうると考えられる。なお、このテクニックは自己表象へのアクセシビリティを測定していると想定されることから、認知表象をより直接的に測定している (Smith & Henry, 1996) と言えよう。

このテクニックを用いて、自己概念の顕在性が変化する機構に関する3つの主要なモデルの内の1つである optimal distinctiveness model について検証した研究が報告されている。当該モデルの提唱者自身によって行なわれた研究である Brewer & Pickett (1999) では、動機づけが強調される実験状況では、optimal distinctiveness model が自己概念の顕在性が変化する機構を適切に説明することを示した。この実験では、一方の条件には「集団成員として、自己と内集団成員性を同一視したい」欲求を高める操作を、もう一方の条件には「集団内の個人として、自己と内集団成員性と区別したい」欲求を高める操作を行なった。つづいて、コンピュータ画面に呈示された性格特性語が〈自分自身〉に「あてはまる」か「あてはまらない」かについて回答するために要する反応時間を測定した。実験の結果、統制条件の被験者に比して、「自己と内集団成員性を同一視したい」欲求を高める操作が行なわれた条件の被験者は、内集団のステレオタイプに一致する性格特性語で、かつ自分自身に「あてはまる」性格特性語に対して回答するさいに要した反応時間の方が、内集団のステレオタイプに一致しない性格特性語で、かつ自分自身に「あてはまる」と回答した性格特性語に対する反応時間よりも有意に短かった。また、「集団内の個人として、自己と内集団成員性と区別したい」欲求を高める操作が行なわれた条件の被験者では、内集団のステレオタイプに一致する性格特性語で、かつ自分自身に「あてはまる」性格特性語に対して回答するために要した反応時間は、内集団のステレオタイプに一致しない性格特性語で、かつ自分自身に「あてはまる」と回答した性格特性語に対する反応時間よりも有意に長かった。この実験結果は、「集団成員として、自己と内集団成員性を同一視したい」という欲求と「集団内の個人として、自己と内集団成員性を区別したい」という欲求が、自己概念の顕在性に影響することを示し、optimal distinctiveness model を支持した。本研究では、動機づけが強調されるような実験状況ではなく、より一般的な集団間比較文脈において、自己概念の顕在性が社会的アイデンティティへ変化する機構を optimal distinctiveness model が説明しうるのかについて検討する。

われわれは、「ストループ効果を応用したテクニック」を集団間関係に適用したこれまでの研究 (Smith & Henry, 1996; Smith, Coats, & Walling, 1999) には、集団研究の観点から考えていくつかの重要な問題点があると考えられる。第一に、これまでの研究では、実際に存在する集団である大学の学部や学生社交クラブに所属しているか否かを内集団と外集団に用いている。しかし、実際に存在している集団を用いた場合、被験者自身が内集団成員として活動した過去の記憶から形成された自己スキーマ (Markus, 1977; Markus, Hamill, & Sentis, 1987) が活性化されてしまう。過去経験を有することは、自己カテゴリー化過程が機能しないことを意味するものではないが、真に検証に値すべきことは集団カテゴリー自体

による認知表象への影響である。なぜならば、過去経験によらず、集団カテゴリーに割り振られるだけで、自分自身を集団成員として認識し、その結果、その集団に基礎をおいた認知処理や行動が引き起こされることこそが興味深いことと考えられるからである (cf. Turner et al., 1987)。したがって、過去経験を有することによって自己が内集団カテゴリーを同一視する可能性を排除して検討することが必要となろう。それゆえに本研究では、「ストループ効果を応用したテクニック」を用いた実験を、成員間の相互作用が存在しない「最小集団実験 (minimal group experiment)」に適用した。

第二に、Smith & Henry (1996) や Smith et al. (1999) が行なった実験では、被験者が所属している集団カテゴリーと外集団カテゴリーについてカテゴリー名に言及するだけで、いかなる集団間比較文脈であるのかについて明確に設定されていない。集団間比較文脈とは「二つないしそれ以上のカテゴリーが比較される集団状況」と定義される。内集団カテゴリーの形成は、集団間比較文脈の様態に従属して、すなわち、集団内の凝集性とともにより平均的な差異によって決定される (Turner et al., 1987)。このことから、社会的アイデンティティへ自己概念の顕在性が変化することには、集団間比較文脈が重要な役割を有することが考えられる。Smith & Henry (1996) や Smith et al. (1999) の実験では、集団に所属しているさいに外集団表象が自己表象に干渉をしなかった一つの可能性として、集団間差別が生じうるような集団間比較文脈ではなかったという可能性が残る。そこで、本研究では集団間差別が生じる集団間比較文脈を明確に設定して実験を行なうこととした。集団間比較文脈に関して、Jetten, Spears & Manstead (1998) は、最小集団実験で集団間差別が生起する、適切な集団間比較文脈を設定することに成功した。彼らの研究は、集団間差別が生起する集団間比較文脈を具体的な数値を示して設定可能とした点で有用性が高い。本研究では、Jetten et al. (1998) が行なった、集団間比較文脈の操作の手続きを採用することとした。以上をまとめると、「ストループ効果を応用したテクニック」を、1) 「最小集団実験」に適用し、2) 内集団と外集団の関係を、集団間差別が生起する集団間比較文脈に設定した上で実験を行なう。

本研究の目的は、集団に所属することによって起こる自己概念の顕在性の変化を、depersonalization (Turner et al., 1987), optimal distinctiveness model (Brewer, 1991), egocentric social categorization model (Simon, 1993) の3つのモデルがそれぞれ、適切に説明しているかについて、自己の認知表象の観点から再検討することであった。本研究では3つの仮説が提起される。ただし、これらの仮説の基礎となるモデルは、すべて自己概念が変化する機構について扱ったモデルであるとともに、また、Turner et al. (1987) による depersonalization (脱個人化) をそのモデルの中に含み持っている。加えて、optimal distinctiveness model は、動機づけの側面を重視したモデルで、egocentric social categorization model は、自己中心的知覚の側面を重視していたモデルであると言える。そして、これらの3つのモデルは、本研究で採用したテクニックを用いることによって、自己の認知表象という共通の枠組みから検討することが可能なモデルでもある。なおこれから論じる3つの仮説は相互に排反であるものではなく、それぞれ独立に検証可能な仮説であり、この中の一つのみが支持されうるわけではない。

Turner et al. (1987) は depersonalization のモデルをとおして、自分自身を内集団カテ

ゴリーの一部として知覚することにより自己概念の顕在性が変化するとした。このモデルから次の仮説が導かれる。

〔仮説Ⅰ〕：自己概念の顕在性が社会的アイデンティティへ変化することは、内集団表象が自己表象の一部となることである。

本研究で用いる「ストループ効果を応用したテクニック」(Aron et al., 1991; Smith & Henry, 1996)では、被験者は、呈示される各性格特性語が<内集団>と<外集団>、そして<自分自身>に対して「あてはまる」か「あてはまらない」かについて質問紙上で回答を求められ、各々の性格特性語がいずれの回答パターンに分類される性格特性語であるかによって独立変数が設定される。回答パターンとは、<内集団>と<自分自身>とについて、および<外集団>と<自分自身>とについて、個々の性格特性語に関してその性格特性語が「あてはまる」か「あてはまらない」かについてどのような組み合わせパターンとして位置づけられるかを意味する。<内集団>と<自分自身>との関係性について検討するさいのこの回答パターンを具体的に示すと、以下のような4つのパターンに分類される。1) <内集団>あてはまる・<自分自身>あてはまると判断された性格特性語、2) <内集団>あてはまらない・<自分自身>あてはまると判断された性格特性語、3) <内集団>あてはまる・<自分自身>あてはまらなると判断された性格特性語、4) <内集団>あてはまらない・<自分自身>あてはまらなると判断された性格特性語、という4パターンである。同様に、<外集団>と<自分自身>との関係性について検討する場合には、<内集団>の部分<外集団>に置き換えることで4つの回答パターンが構成される。例えば、回答パターン1)は、<外集団>あてはまる・<自分自身>あてはまると判断された性格特性語となる。質問紙上での判断に引き続いて、コンピュータ画面上に各性格特性語が呈示された時に、その性格特性語が<自分自身>に「あてはまる」か「あてはまらない」かについて回答するさいに要する反応時間が従属変数とされた。そのさい、仮説Ⅰの作業仮説は次のようになる。

〔作業仮説Ⅰ〕：<内集団>、<自分自身>に対してともに「あてはまる」と回答された性格特性語に対する反応時間は、<内集団>には「あてはまる」が<自分自身>には「あてはまらない」と回答された性格特性語に対する場合よりも、<自分自身>について回答する反応時間が有意に短い。

なお、これより以下で論じる2つの仮説を導く各モデルは、先の述べたように depersonalization (Turner et al., 1987) 過程をその基礎としているがゆえに、そのモデルから導き出される仮説は、上記の仮説Ⅰの内容をその一部として含んでいる。

Brewer (1991) は optimal distinctiveness model で、集団に所属する個人は「集団成員として、自己と内集団成員性を同一視したい」という欲求と「集団内の個人として、自己と内集団成員を区別したい」という欲求が均衡するアイデンティティのレベルを採用すると主張した。このモデルから、仮説Ⅱが導かれる。

〔仮説Ⅱ〕：自己概念の顕在性が社会的アイデンティティへ変化することは、内集団表象が自己表象の一部となることと同時に、内集団表象と自己表象を差別化することである。この仮説Ⅱを本研究の実験課題に適用した作業仮説は、次の通りである。

〔作業仮説Ⅱ〕：<内集団>、<自分自身>に対してともに「あてはまる」と回答された性格特性語に対しては、他の回答パターンとして分類された性格特性語（具体的には、<内集

団>に「あてはまる」が<自分自身>に「あてはまらない」と回答された性格特性語、および<内集団>に「あてはまらない」が<自分自身>に「あてはまる」性格特性語、および<内集団>、<自分自身>に対してともに「あてはまらない」性格特性語である)に比べて、<自分自身>について回答する反応時間が有意に短い。

Simon (1993) は egocentric social categorization model で、「自分自身か、もしくは、自分自身以外か」という自己中心的な知覚が自己概念の顕在化が変化する機構を決定しているとした。そしてこの知覚は、集団に所属しているときは「われわれ自身か、もしくは、われわれ以外か」という知覚となるとした。このモデルから仮説Ⅲが導き出される。

[仮説Ⅲ]: 自己概念の顕在性が社会的アイデンティティへ変化することは、内集団表象が自己表象の一部となることと同時に、外集団表象と自己表象を差別化することである。仮説Ⅲを検証するための作業仮説Ⅲは、以下に示す通りとなる。

[作業仮説Ⅲ]: <内集団>、<自分自身>に対して、ともに「あてはまる」と回答された性格特性語に対しては、<内集団>に「あてはまる」が<自分自身>には「あてはまらない」と回答された性格特性語に対してよりも、<自分自身>について回答するさいの反応時間が有意に短い。また、<外集団>に「あてはまる」が<自分自身>に「あてはまらない」と回答された性格特性語、ならびに、<外集団>に「あてはまらない」が<自分自身>に「あてはまる」と回答された性格特性語は、<内集団>と<自分自身>に対してともに「あてはまる」、もしくはともに「あてはまらない」と回答された性格特性語に対してよりも、<自分自身>について回答するさいの反応時間が有意に短い。

## 方 法

### 予備実験

#### 目的

本研究で設定される集団間比較文脈が、集団間差別を導く集団間比較文脈となっていることを確認する。

#### 方法

被験者 信州大学の学生18名(男子8名, 女子10名)。年齢は18歳から21歳。

#### 装置と実験材料

- (1) AV タキストスコープ「IS-701A」(株)岩通アイセル製を使用した。
- (2) 坂元(1995)で用いられた文章刺激を一部改変して作成した、ある人物「Lさん」の日常の生活についての文章を用いた。
- (3) 中里(1985), 大村(1990)から抜粋して作成した、ある人物「Lさん」の性格を記述した4つの文章を用いた。この4つの性格記述文は、知性などの点でほぼ同程度の評定がなされたことが事前に確認されている。

手続き 実験の初めに、この実験での内集団と外集団となる集団カテゴリーについて教示を行なった。この教示では、人は他者の性格を判断するときに「全体的な印象を形成して判断を行なうタイプ」と「個別の性格特性の評定を加算して判断を行なうタイプ」のどちらかの判断様式をとると告げた。そして、この2つの判断様式について具体例を挙げながら説明



した。

次に、この研究の目的について、「全体的な印象を形成して判断を行なうタイプ」と「個別の性格特性の評定を加算して判断を行なうタイプ」のどちらが総合的な判断能力という点で優れているかを検証することである、とする表向きの目的を被験者に告げた。その後、被験者自身がいずれの判断様式に属するかを識別するためと称する課題の内容について説明した。この課題では、ある人物の性格特性を同じ画面に8つ、5秒間画面に呈示して、被験者はその人物がどのような人であるかを自由記述形式で回答した。被験者がこの課題を3試行行なった後に、実験者は、その場でこの課題の結果を集計するふりをした。

ここで、被験者に対して、被験者自身は「全体的な印象を形成するタイプ」である、とする偽りの教示を行なった。次に、詳細な集計結果として、内集団にあたる「全体的な印象を形成するタイプ」群と、外集団にあたる「個別の評価を加算するタイプ」群の得点分布を被験者に呈示した。この得点分布では、横軸に判断様式をあらわす程度（「ポイント」）が示されており、「極端に個別の性格特性の評定を加算して判断する」とラベルづけされた「0」ポイントから、「極端に全体的な印象を形成して判断する」とラベルづけされた「100」ポイントまでの範囲をとった。また縦軸には、ポイントごとの人数が表示された。われわれは、この得点分布を、Jetten et al. (1998) が実験に用いた「大きな集団間距離と小さな集団内変動性」という2つの条件を満たすように作成した。この研究では、「大きな集団間距離と小さな集団内変動性」という条件が組み合わされたときに、被験者は両集団を有意に差別化することが示されている。なお、この得点分布を呈示するとき、「全体的な印象を形成するタイプ」は被験者自身が所属する内集団の群であり、「個別の評価を加算するタイプ」は外集団であることを被験者に教示した。Jetten et al. (1998) の手続きにならい、上記の分布を何の解釈もなしに20秒間呈示した後に、得点分布の解釈を呈示しながら説明を加え、得点分布を再び20秒間呈示した。

次に、両タイプのどちらが総合的な判断能力の点において、より優れているかを検討する課題を引き続いて行なうと被験者に告げ、ある人物「Lさん」の日常の生活が描かれている文章を呈示した。Lさんの日常の生活が描かれている文章を読み終えたあとに、Lさんがどのような性格かについて想像する時間を20秒間与えた。その後、被験者が行なう課題の説明を行なった。まず、「全体的な印象を形成するタイプ」および「個別の性格特性を加算するタイプ」の人たちが、Lさんの日常の生活を描いた文章を読み、Lさんがどのような性格であると思うかについて自由記述形式で回答した結果が手元にある、と被験者に偽りの教示を行なった。そして被験者の課題は、Lさんに対して自由記述形式で書かれた性格記述文を読んで、この記述文を作成した人物の性格を判断することであると告げられた。この課題で呈示される性格記述文は、均等な評定が得られることが事前の調査において確認されている文章であった。独立変数は、評定する対象が内集団成員であるか、外集団成員であるかである。この操作は、呈示された各文章がどちらの判断様式のタイプに属する人物によって作成されたかについて、「全体的な印象を形成するタイプ」もしくは「個別の性格特性を加算するタイプ」というラベルを、性格記述文が書かれている上部に並記することで行なった。そして被験者は、Lさんに対する性格記述文を読んで、その記述文を作成した人物の性格を評定した。なお被験者は評定を行なう直前に、性格記述文を作成したそれぞれの人物が「全体

的な印象を形成するタイプ」と「個別の性格特性の評定を加算するタイプ」のどちらに属するかについての確認を求められた。この回答は、これから行なう印象評定の対象が内集団成員か、もしくは外集団成員なのかを確認する目的をもつ。印象評定の回答形式は、各項目に対して1（全くあてはまらない）から9（とてもあてはまる）までの9件法であった。評定項目は、柏木・和田・青木（1993）が「知性」を示す性格特性に割り当てた8つの形容詞である。なお、肯定的な意味をもつ形容詞と否定的な意味をもつ形容詞が同数になるようにした。印象評定の終了後、被験者は操作チェック項目に回答し、実験の真の目的についての説明とディブリーフィングを受けた。

## 結果

操作チェック 操作チェック項目は、1) 被験者自身が所属するカテゴリーを正しく認識できたかを測定する項目、2) 教示によって、内集団と外集団が明確に分かれていると被験者が認識していたかを測定する項目、3) 実験で呈示されたグラフで、内集団と外集団を明確に分けられていると認識していたかを測定する項目の3項目であった。1つめの項目の回答形式は「全体的な印象を形成する・どちらか明確でない・個別の評定を加算」のいずれか一つを選択するものであった。この結果、全ての被験者が実験操作どおり、内集団に該当する「全体的な印象を形成するタイプ」を選択した。2つめ、3つめの項目の回答形式は1（全く分けられていなかった）から4（明確に分けられていた）までの4件法であった。2つめの項目の評定平均値（ $M=3.11$ ,  $SD=.47$ ）、3つめの項目の評定平均値（ $M=3.72$ ,  $SD=.57$ ）、それぞれを理論的中点である2.5を比較値として片側  $t$  検定を行なった。その結果、2つめの項目（ $t(17)=5.50, p<.05$ ）、3つめの項目（ $t(17)=9.02, p<.05$ ）ともに比較値よりも有意に高い得点であることが示された。したがって、実験操作は有効であることが示された。

質問紙上での評定値の処理 1名の被験者が実験の意図を十分に理解することができなかったためにデータから削除することとした。この実験で被験者は、性格記述文を書いた人物が有している性格について回答を行なった。否定的な性格特性語に「とてもあてはまる」を1点、肯定的な性格特性語に「とてもあてはまる」を9点として得点化した。8項目を合計した値で片側  $t$  検定を行なった。その結果、内集団成員に該当する「全体的な印象を形成するタイプ」の得点（ $M=5.57$ ,  $SD=1.17$ ）が、外集団成員に該当する「個別の評定を加算するタイプ」の得点（ $M=5.08$ ,  $SD=0.57$ ）よりも有意に高いことが示された（ $t(17)=1.93, p<.05$ ）。

以上のことから、本研究で用いる集団間比較文脈は、集団間差別の生起を導く比較文脈であることがこの予備実験により確認された。そして、予備実験と同様の集団間比較文脈が本実験でも用いられることから、本実験では内集団と外集団が明確に差別される集団間比較文脈で自己の認知表象について検討することが可能となった。

## 本 実 験

### 目 的

自己表象、内集団表象、外集団表象という3つの表象の関連性について、「ストループ効

果を応用したテクニック」(Aron et al., 1991)を用いて、集団に所属することで起こる自己概念の顕在性が変化する機構に関する主要な3つのモデル各々の適否について検証する。

## 方 法

**被験者** 信州大学の学生42名(男性24名,女性18名)。年齢は18歳から25歳である。なお、本実験の被験者のなかで、予備実験に参加した者はいなかった。

**装置と実験材料** 予備実験と同じ。

**手続き** Lさんの日常の生活が描かれている文章を呈示して、被験者自身にLさんの性格について想像する時間を20秒間与えるまでは予備実験と全く同じ手続きである。次の課題では、1) Lさんの性格記述文を、「全体的な印象を形成するタイプ」か「個別の性格特性の評定を加算するタイプ」のいずれか一方に属する人物によって作成された性格記述文であるとして呈示する、2) 被験者自身の性格特性についても回答を求める、の2点が予備実験と異なっている。

課題についての教示の要旨は以下の通り。まず、「全体的な印象を形成するタイプ」および「個別の性格特性を加算するタイプ」の人たちに、Lさんの日常の生活を描いた文章を読み、Lさんがどのような性格であると思うかについて自由記述形式で回答してもらった、とする偽りの教示を被験者に対して行なった。そして、多くの人たちの回答から、「全体的な印象を形成するタイプ」および「個別の性格特性を加算するタイプ」に属する人たちそれぞれにおいて典型的と考えられる回答を取り出して、各タイプの文章を作成した、と告げた。そして、被験者の課題は、このLさんに対する性格記述文を読んだ上で、この文章を作成した「全体的な印象を形成するタイプ」および「個別の性格特性を加算するタイプ」に属する人が有する性格を判断することであると伝えた。さらに、被験者自身がどのような性格をもつのかについても回答してもらおうと告げた。この課題での回答パターン(以下に詳述)を独立変数として設定した。

この課題で被験者は、<自分自身>、<内集団> (「全体的な印象を形成するタイプ」)、<外集団> (「個別の性格特性を加算するタイプ」)の各対象に対して、25項目の性格特性が「あてはまる」か「あてはまらない」かについて、質問紙上で回答を求められた。すなわちこの課題では、3回にわたって同様の判断が対象を変えて求められた。個々の性格特性ごとに示される、3つの対象に対する回答パターンを独立変数として設定する。具体的には、<自分自身>と<内集団>の2つの対象間の関連を検討する分析では、<自分自身> (「あてはまる」「あてはまらない」と<内集団> (「あてはまる」「あてはまらない」)の2つの要因から構成される $2 \times 2$ の4通りの組み合わせのうち、いずれのパターンで回答をしたのかを独立変数とした。また、<自分自身>と<外集団>の2つの対象間の関連を検討する分析では、<自分自身> (「あてはまる」「あてはまらない」)と<外集団> (「あてはまる」「あてはまらない」)の $2 \times 2$ の4通りの組み合わせのうち、いずれのパターンで回答をしたのかを独立変数とした。なお<自分自身>の性格特性について回答するさいには、被験者がどちらの集団に所属しているのかについて正しく把握していることを確認するために、直前の課題での判定結果において、被験者自身が「全体的な印象を形成するタイプ」もしくは「個別の性格特性を加算するタイプ」のどちらのタイプであると判定されたかを2件法で選択させた。性格特性の評定は予備実験と同じく、各性格特性項目に対して1(全くあては

まらない)から9(とてもあてはまる)までの9件法で回答を求めた。性格特性語は、柏木ら(1993)での性格特性語から(予備実験で使用した8項目を含む)25項目を選択した。そのさい、肯定的な性格特性と否定的な性格特性をできるだけ均等に含むように選択した。

質問紙への回答後、被験者はAVタキストスコープ(岩通アイセル製AVタキストスコープIS-701A)の前に着席した。表向きの実験目的として、質問紙上での回答を行なった被験者と、それを行なわなかった被験者のあいだで、コンピュータ上での反応のちがいを比較することが目的であるとする、偽りの教示を被験者に対して行なった。次に、画面上に性格特性語が示された時に、性格特性語があなた自身の性格に「あてはまるなら」なら“はい”のキーを、「あてはまらない」なら“いいえ”のキーをできるだけ速くかつ正確に押すように告げた。被験者は、画面上に呈示された性格特性が、自分自身に「あてはまる」か「あてはまらない」かについてできるだけ速く回答した。この反応(「あてはまる」か「あてはまらないか」)に要する反応時間を測定した。画面上に呈示される性格特性は、質問紙上で回答を求められた課題で用いられたものと同じ25項目の性格特性で、1特性ずつランダムに呈示された。この課題の終了後、被験者は操作チェック項目への回答を行い、最後に実験の真の目的についての説明とデブリーフィングを受けた。

## 結 果

### 操作チェック

被験者は、予備実験と同様の3つの項目に対して回答を求められた。1つめの項目の回答形式は「全体的な印象を形成する・どちらか明確でない・個別の評定を加算」の一つを選択するものであった。その結果、全ての被験者が、実験での操作どおりに、内集団に該当する「全体的な印象を形成するタイプ」を自分自身のタイプとして回答した。2つめ、3つめの項目の回答形式は1(全く分けられていなかった)から4(明確に分けられていた)までの4件法であった。教示において内集団と外集団が明確に分けられていたかについて問うた、2つめの操作チェック項目の評定値( $M=3.26$ ,  $SD=.63$ ), また、呈示されたグラフにおいて内集団と外集団が明確に分けられていたかについて問うた、3つめの項目の評定値( $M=3.67$ ,  $SD=.57$ )それぞれを理論的中点である2.5を比較値として片側 $t$ 検定を行なった。その結果、2つめの項目( $t(41)=7.87, p<.05$ ), 3つめの項目( $t(41)=13.26, p<.05$ )ともに比較値よりも有意に高い得点であることが示された。したがって、実験操作は有効であったことが示された。

### 反応時間分析

結果の分析を行なうために、「全体的な印象を形成するタイプ」と「個別の評価を加算するタイプ」(それぞれ被験者にとって<内集団>と<外集団>に該当する), <自分自身>の3対象に対して行われた質問紙上での9件法の回答を3カテゴリーに分類した。1から4を「あてはまらない」、6から9を「あてはまる」の各カテゴリーに分類した。そして、5(尺度の中点で「どちらでもない」にあたる)の反応を行なったデータは分析から除外した。<自分自身>に対する回答で除外した回答数は全1050回答(25[項目数]×42[被験者数])のうち29回答(全体の2.8%), 「全体的な印象を形成するタイプ」<内集団>に対する

回答で除外した回答数は全1050回答のうち22回答（全体の2.1%）、「個別の性格特性を加算するタイプ」＜外集団＞に対する回答で除外した回答数は全1050回答のうち21回答（全体の2.0%）であった。

また、この反応時間分析では、実験をはじめる以前に取り決めた基準にしたがって300msよりも速い、あるいは5000msよりも遅い反応は除外した。この基準で除外した回答数は全1050反応のうちの3反応だけで、全体の0.3%に過ぎなかった。またここで、質問紙上で行なった自分自身に対する回答（「あてはまる（6～9）」と「あてはまらない（1～4）」の2分法）と、反応時間を測定する課題で行なった自分自身に対する回答（「あてはまる」か「あてはまらない」かの2反応）が一致しなかった反応を、エラー反応（不一致反応）と定義して反応時間分析からは除外した。この基準で除外した回答数は、1021反応（1050 [全項目] - 29 [中点(5)の回答項目]）のうちの166反応（16.3%）であった。

この分析では3つの被験者内要因（それぞれ2水準）が設定された。「＜自分自身＞（あてはまる、あてはまらない）」、「＜内集団＞（あてはまる、あてはまらない）」、「＜外集団＞（あてはまる、あてはまらない）」である。ただし、本研究では「＜自分自身＞（あてはまる、あてはまらない）の2水準」×「＜内集団＞（あてはまる、あてはまらない）の2水準」の2要因（2×2）分散分析と、「＜自分自身＞（あてはまる・あてはまらない）の2水準」×「＜外集団＞（あてはまる・あてはまらない）の2水準」の2要因（2×2）分散分析を行なった。3要因分散分析として検定を行なう場合、当然のことながら、3つの被験者内要因によって構成されるすべてのセルにデータが存在しないとその被験者のデータは分析に用いることができない。本研究は、被験者が回答する性格特性項目語が25項目であり、さらに、質問紙上での回答において被験者が中点（5：「どちらでもない」にあたる）と回答した性格特性語は分析対象から除外されるために、3要因分散分析によって得られる結果には、仮説を検証するための十分な妥当性がないと考えられる。なお具体的には、3要因分散分析を行なうことができる被験者は5名のみであった。

＜自分自身＞と＜内集団＞に関する分析（反応時間） 「＜自分自身＞（あてはまる、あてはまらない）2水準」×「＜内集団＞（あてはまる、あてはまらない）2水準」の被験者

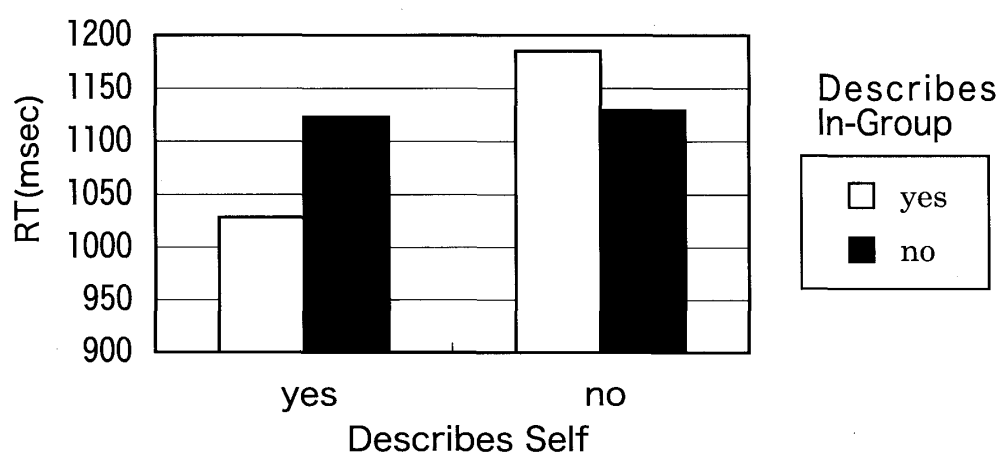


Fig 1: Reaction time (in milliseconds) by self-descriptiveness and in-group descriptiveness.

内2要因(2×2)分散分析を行なった結果、有意な2要因交互作用効果がみられた( $F(1,37)=6.78, p<.05$ ; Fig. 1: なお図中では、「あてはまる」を“yes”, 「あてはまらない」を“no”として記載した)。下位検定の結果、「<自分自身>(あてはまる)」・「<内集団>(あてはまる)」と回答された性格特性語に対する反応時間は、「<自分自身>(あてはまらない)」・「<内集団>(あてはまる)」と回答された性格特性語に対する反応時間よりも、有意に長いことが示された( $p<.05$ )。なお、<自分自身>の要因の主効果には傾向差がみられ( $F(1,37)=2.99, p<.10$ )、<内集団>の要因の主効果には有意差が認められなかった( $F(1,37)=0.62, ns.$ )。

<自分自身>と<外集団>に関する分析(反応時間) 「<自分自身>(あてはまる, あてはまらない)2水準」×「<外集団>(あてはまる, あてはまらない)2水準」の被験者内2要因(2×2)分散分析を行なった結果、有意な交互作用効果は認められなかった( $F(1,34)=0.86, ns.$ ; Fig. 2: 図中では「あてはまる」を“yes”, 「あてはまらない」を“no”として記載した)。すなわち、呈示された性格特性が<自分自身>に対してあてはまるか否かを回答するさいの反応時間には、<外集団>に対して当該の性格特性があてはまるか否かは何ら影響を有していなかった。なお、<自分自身>の要因の主効果で有意差がみられ( $F(1,34)=4.85, p<.05$ )、<外集団>の要因の主効果で有意差はみられなかった( $F(1,34)=0.06, ns.$ )。<自分自身>の要因の主効果は、<自分自身>に「あてはまる」と回答するときのほうが、「あてはまらない」と回答するときよりも速く判断をするという効果であり、これまでの研究で常に一貫して示されてきた一般的な反応傾向を反映した結果であり、本研究の仮説に直接かかわるものではない(cf. Aron et al., 1991)。

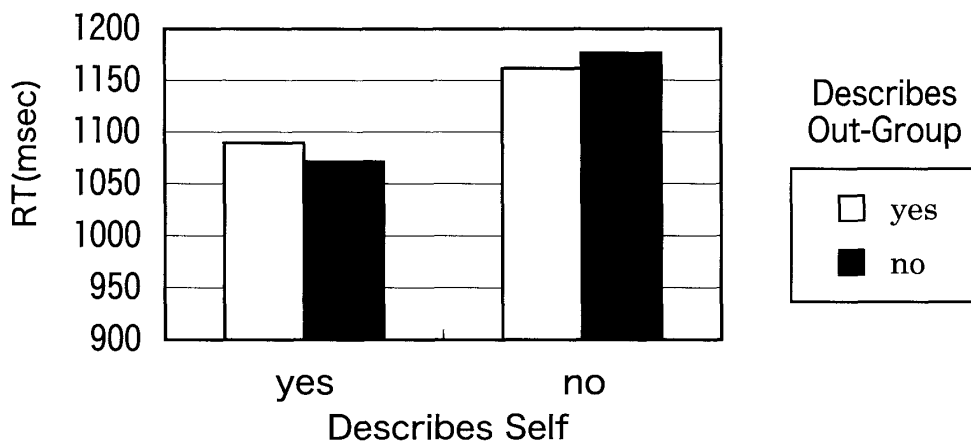


Fig 2: Reaction time (in milliseconds) by self-descriptiveness and out-group descriptiveness.

#### エラー反応(不一致反応)分析

エラー反応は全反応の16.3%であった。エラー反応の百分率を角変換して分析に投入した。

<自分自身>と<内集団>に関する分析(エラー率) 「<自分自身>(あてはまる, あてはまらない)2条件」×「<内集団>(あてはまる, あてはまらない)2条件」の被験者内2要因(2×2)分散分析を行なった。その結果、有意な2要因交互作用効果がみられた( $F(1,41)=9.35, p<.05$ ; Table 1: 表中では「あてはまる」を“yes”, 「あてはまらない」

を“no”として記載した)。下位検定の結果、＜内集団＞と＜自分自身＞に対してともに「あてはまる」と回答された性格特性語では、＜自分自身＞「あてはまらない」・＜内集団＞「あてはまる」と回答された性格特性語よりもエラー反応の比率が有意に低かった ( $p < .01$ )。なお、＜自分自身＞の要因の主効果において有意な傾向差がみられ ( $F(1,41) = 8.61, p < .10$ )、＜内集団＞の要因の主効果では有意差は認められなかった ( $F(1,41) = .91, ns.$ )。これらの結果は、反応時間分析の結果と一貫している。

Table 1 Response error (%) by self-descriptiveness and in-group descriptiveness

	Describes Self		
	yes	no	
Describes In-Group	yes	11.11	28.66
	no	18.32	18.18

＜自分自身＞と＜内集団＞に関する分析（エラー率） 「＜自分自身＞（あてはまる，あてはまらない）2水準」×「＜外集団＞（あてはまる，あてはまらない）2水準」の被験者内2要因（2×2）分散分析を行なった結果，有意な2要因交互作用効果は認められなかった ( $F(1,41) = .04, ns.$ ; Table 2: なお表中では，「あてはまる」を“yes”，「あてはまらない」を“no”として記載した)。＜自分自身＞の要因の主効果では有意差がみられ ( $F(1,41) = 10.49, p < .05$ )，＜外集団＞の要因の主効果には有意差がみられなかった ( $F(1,41) = .00, ns.$ )。これらの結果も，反応時間分析と一貫するものであった。

Table 2 Response error (%) by self-descriptiveness and out-group descriptiveness

	Describes Self		
	yes	no	
Describes Out-Group	yes	13.27	20.27
	no	13.58	25.54

以上より本研究結果は，反応時間分析，エラー反応分析ともに，自己概念が社会的アイデンティティへ変化することは，内集団表象が自己表象の一部となることであるとした仮説Iを支持した。その一方，仮説IIおよび仮説IIIは支持されなかった。

## 考 察

本研究での結果を要約すると，＜内集団＞と＜自分自身＞に対してともに「あてはまる」と回答した性格特性語に対しては，＜内集団＞に「あてはまる」が＜自分自身＞に「あてはまらない」と回答した性格特性語に対してよりも，その特性語が＜自分自身＞にあてはまるかどうかについて回答するさいに要する反応時間が短く，またエラー反応（不一致反応）の比率も低かった。しかしその一方で，性格特性語が＜外集団＞に「あてはまる」か「あてはまらない」ということは，＜自分自身＞について回答するさいの反応時間や，回答のさい

のエラー反応比率には影響を及ぼさなかった。以上の結果から本研究は、自己概念の顕在性が個人的アイデンティティから社会的アイデンティティへ変化するのは、内集団表象が自己表象の一部となることであるとする仮説Ⅰを支持したが、仮説Ⅱと仮説Ⅲは支持しなかった。

本研究で示された一連の結果は、Smith & Henry (1996) や Smith et al. (1999) の実験結果と一貫するものであった。しかし前述したように本研究は、彼らの実験を単に追試したものではない。第一に本研究では、「ストループ効果を応用したテクニック」(Aron et al., 1991) を成員間の相互作用がない最小集団実験に適用した。このことによって本研究は、過去の経験の集合に基づいた自己スキーマの働きによって、内集団表象が自己表象の一部となる可能性を排除した。第二に本研究では、内外集団間が明確に差別化されるような集団間比較文脈を設定した。このことにより、Smith & Henry (1996) や Smith et al. (1999) で示された実験結果は、実際に存在している集団を取りあげたことによって、自分自身について回答するさいの反応時間に、内集団表象が影響を及ぼしたことに結びついたものではないことを明らかにした。このことはさらに、Smith & Henry (1996) の研究で外集団表象が自分自身についての回答における反応時間に影響を及ぼしていなかったことは、内外集団間が差別化されない集団間比較文脈にあったことが原因ではなかったことをも示した。

仮説Ⅱの論拠となった optimal distinctiveness model (Brewer, 1991) は、モデルの提唱者自身によって、動機づけが強調される実験状況においてはそれを支持した研究が報告されている (Brewer & Pickett, 1999)。しかしながら本研究の結果から、動機づけが強調されない一般的な集団間比較文脈ではこのモデルが適用できないことを示唆した。仮説Ⅲの論拠となる egocentric social categorization model (Simon, 1993) も、本研究では支持されなかった。特筆すべきこととして本研究は、自分自身について注目している時に起こりやすい状況であるとされる、Simon (1993) のいう準集団間状況 (quasi-intergroup situation) との類似性が高い状況設定であったにもかかわらず、egocentric social categorization model を支持しなかった。Simon (1993) が実施した実験では、外集団カテゴリーは呈示されるものの、内集団カテゴリーが被験者に呈示されない設定であったのに対して、本研究では、被験者が所属する内集団カテゴリーと外集団カテゴリーを明確に呈示していた。以上のことから本研究は、egocentric social categorization model が適用できるのは、準集団間状況が特に強調されるときに限定され、一般的な集団間文脈ではこのモデルは適用できないことを示していよう。

本研究は、「ストループ効果を応用したテクニック」(Aron et al., 1991) を集団間比較文脈に適用した Smith & Henry (1996) の研究に対して、自己概念の顕在性が個人的アイデンティティから社会的アイデンティティへどのような機構で変化するかについてより適切に検討するために、2つの点で改変を加えて実験研究を行なったものであった。ここで、本研究で行われた操作が妥当なものであったかについて検討する。まず本研究が、内集団成員性のみを強調し、外集団非成員性を強調していなかったがために、内集団成員性と結びつく内集団表象が自己表象に影響をおよぼした一方で、外集団非成員性に結びつけられた外集団表象が自己表象に影響をおよぼさなかったという代替説明の成立可能性について検討する。われわれは、以下に示す4つの理由から、被験者が「内集団成員性」ではなく「外集団非成員性」を意識していたならば異なる結果が得られる、という蓋然性は低いと主張する。第一に、



本研究では「最小集団実験」を採用し、排他的関係にある2つの集団のみが存在している実験状況を設定している。この実験状況は、被験者が一方の集団に属していることは、もう一方の集団に属していないことを同時に意味している。第二に、実験手続きの中で、被験者にこのことを明確に教示している。具体的には、被験者が所属する集団を教示した後に、内集団と外集団の分布を図示したが、この時に「全体的な印象を形成するタイプ」の群は被験者自身が所属する集団の分布であること、そして「個別の評価を加算するタイプ」の群は被験者自身が所属していない集団の分布であることを教示した。第三に、本研究で呈示した内集団と外集団の分布図は、内集団と外集団の両群に重なりがなく明確に分離されていたために、内集団となる群の成員であることは外集団となる群の成員ではないことを直接的に意味している。第四に、被験者がどちらの集団に所属しているかを確認するための回答は、「全体的な印象を形成するタイプ」もしくは「個別の性格特性を加算するタイプ」の二者択一形式であった。この設問に対して自分自身にとっての内集団を回答することは、内集団と外集団が排他的関係にあるがゆえに、それは自己が所属していない外集団をも同様に明示していると言えよう。以上の4つの理由から、本実験状況における被験者は「内集団成員性」と同様に「外集団非成員性」を十分に認識しており、被験者が「外集団非成員性」を意識しなかったために本研究結果が導き出された蓋然性は極めて低いと主張する。

本研究結果自体の解釈とは別問題として、より一般的な問題として考えるならば、内集団成員性が十分に明確ではなく、さらに外集団非成員性が極端に強調されるような実験状況において、自己表象が外集団表象から影響を受けるか否かについて検討することは興味深い。このような状況では、内集団成員性が明確でないために、内集団表象を自己と同一視することで社会的アイデンティティを確立することは難しい。内集団カテゴリーが明確に示されない集団状況下におかれた個人がどのような自己概念をいだくのか、またそのような状況下で、外集団非成員性が強調された場合に、自己表象がどのように変化するかを検討することは今後の興味深い課題である。

本研究で設定した、成員間の相互作用が存在しない「最小集団実験」とは異なり、より動的な社会的状況下での効果も検討の価値があるだろう。もちろんこのことは、人工的な「最小集団実験」での価値を減じるものではなく、両者は相互補完的な意義を有する。本研究で示された結果は、集団に所属する個人は内集団成員性にのみ影響を受けることをあらわした。しかし、たとえば典型的な研究例としてSherif (1966)による古典的なフィールド研究では、少年たちを対象としたキャンプ場面での実験で、少年たちは集団間が競争状態にあるときは外集団成員に対する非難や攻撃を行ない、集団間で協力する必要が高められた状態にあるときには集団の境界を越えた友情を形成することを示した。この研究結果から、集団間関係が変容することによって、自己概念の顕在性が外集団成員との相互作用によって変化しうること示唆している。集団間の関係性が刻々と変容しうる社会的集団に所属している状況下では、自己概念が個人的アイデンティティから社会的アイデンティティへ変化するさいにその顕在性がどのように集団間関係の影響を受けているのかについて、社会的な表象をより直接的に測定しうるような認知的な測度を用いて検討することは、今後の課題と言えよう。

本研究は、集団に所属するときに「内集団表象が自己表象の一部となる」ことを示した。自己カテゴリー化理論におけるdepersonalization (脱個人化)とは、「自己が内集団の一部

となる」(Turner et al., 1987) ことであると定義されており、このことは、「自己表象が内集団表象の一部となる」ということをも意味しうると考えられる。この点に関連して Smith et al. (1999) は、コンピュータ画面に呈示された性格特性が<内集団>に対して「あてはまる」か「あてはまらない」かについて回答を求め、その反応時間を測定する実験を実施している。その結果は、<内集団>に「あてはまる」か「あてはまらない」かについて回答するために要する反応時間に対して、<自分自身>にその性格特性があてはまるか否かということが影響を及ぼしていた。このことは<内集団>への回答に対して、<自分自身>にその性格特性があてはまるか否かということが干渉を引き起こしていることを意味している。Smith & Henry (1996) と Smith et al. (1999) の結果を総合して考えると、集団に所属している時には自己表象と内集団表象が相互に影響を及ぼしあうかたちで自己概念と内集団表象の包摂関係を形成している概然性が高いと考えられる。ただし、これまでに論じてきたように、Smith et al. (1999) の研究では、自らが実際の生活で所属している集団を用いているために、過去の経験の集合によって形成された自己スキーマの働きによって自己表象と内集団表象の相互包摂関係が成立しているという代替説明を排除できていない。集団カテゴリー自体による認知表象への影響を的確に検証するためには、過去経験が存在していない「最小集団実験」を用いて検討する必要があると言えよう。

自己概念の顕在性 (salience) が変化する機構に関する主要なモデルである、depersonalization (Turner et al., 1987), optimal distinctiveness model (Brewer, 1991), egocentric social categorization model (Simon, 1993) の各々のモデル、および、自己概念の顕在性の変化という基礎的な概念は、実証的には間接的な支持しか受けないままに多くの集団研究に影響を与えてきた。しかし、Smith & Henry (1996) が指摘するように、表象間でのアクセシビリティ自体をできるだけ直接的に測定するような、より認知的な過程の測定を志向するような測度を用いてこれらのモデルについて検討していくことは、モデル自体の適応可能性を根元的なレベルに立ち返って検討することや、そのことによる理論のさらなる発展につながる。加えて、認知的な過程を志向する測度を集団成員間の相互作用がない「最小集団実験」に適用することは、集団成員間に起こる社会的相互作用や、集団成員として行動した過去の記憶などの要因を排除した上で、集団カテゴリー自体が自己概念の顕在性変化に影響を及ぼす機能について検討可能とする有効な手段であると言えよう。

## 引用文献

- Aron, A., Aron, E. N., Tudor, M., & Nelson, G. (1991) Close relationships as including other in the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 2, 241-253.
- Brewer, M. B., & Pickett, C. L. (1999) Distinctiveness motives as a source of the social self. In Tylor, T. R., Roderick, M. K., & Oliver, P. J. (Eds.), *The psychology of the social self*, pp. 71-87. Mahwah, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Brewer, M. B. (1991) The social self: On being the same and different the same time. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **17**, 5, 475-482.
- Hogg, M., & Abrams, D. (1988) *Social identifications: A social psychology of intergroup relations*

- and group processes*. London: Routledge.
- Jetten, J., Spears, R., & Manstead, A. S. R. (1998) Defining dimensions of distinctiveness: Group variability makes a difference to differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 6, 1481-1492.
- 柏木繁男・和田さゆり・青木孝悦 (1993) 性格特性の BIG FIVE と日本語版 ACL 項目の斜交因子基本パターン 心理学研究, **64**, 2, 153-159.
- Kuiper, N. A. (1981) Convergent evidence for the self as a prototype: "The inverted-U RT effect" for self and other judgments. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **7**, 3, 438-443.
- Markus, H., Hamill, R., & Sentis, K. P. (1987) Thinking fat: Self-schemas for body weight and the processing of weight relevant information. *Journal of Applied Social Psychology*, **17**, 1, 50-71.
- Markus, H. (1977) Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 2, 63-78.
- 中里浩明 (1985) 暗黙裡の血液型性格観に関する研究 神戸女学院論集, **32**, 11-40.
- 大村政男 (1990) 『血液型と性格』 福村出版
- 坂元 章 (1995) 血液型ステレオタイプによる選択的な情報利用—女子大学生に対する 2 つの実験— 実験社会心理学研究, **35**, 1, 35-48.
- 嶋田博行 (1985) 認知的葛藤 (Stroop 効果) の再検討—差異心理学と注意理論との接点を求めて 大阪大学人間科学部紀要, **11**, 53-82.
- Simon, B. (1993) On the asymmetry in the cognitive construal of ingroup and outgroup: A model of egocentric social categorization. *European Journal of Social Psychology*, **23**, 131-147.
- Sherif, M. (1966) *In common predicament: Social psychology of intergroup conflict and cooperation*. Boston: Houghton-Mifflin.
- Smith, E. R., Coats, S., & Walling, D. (1999) Overlapping mental representations of self, in-group, and partner: Further response time evidence and a connectionist model. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 7, 873-882.
- Smith, E. R., & Henry, S. (1996) An in-group becomes part of the self: Response time evidence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 6, 635-642.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979) An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The Social Psychology of Intergroup Relations*, Monterey, Calif.: Brooks-Cole.
- Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D. & Wetherell, M. S. (1987) *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford, U.K.: Basil Blackwell.
- Turner, J. C., & Onorato, R. S. (1999) Social identity, personality, and the self-concept: A self-categorization perspective. In Tylor, T. R., Roderick, M. K. & Oliver, P. J. (Eds.), *The psychology of the social self*, pp. 71-87. Mahwah, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.

## **How In-Group and Out-Group Representations Prescribe Social Self-Concept : An Investigation by the Application of the Stroop Effect Technique**

Kimihiko SHIOMURA (Faculty of Arts, Shinshu University)  
Katsuhiko UEDA (Graduate School of Letters, Kobe University)

### **ABSTRACT**

Recent studies on intergroup behavior have emphasized shifts in self-concept in intergroup behavior, but few studies have directly addressed the way the shifting take place. Using actually existing natural groups, Smith & Henry (1996) studied the way in which shifts in self-concept were made, by examining how self-descriptiveness is prescribed by in-group and out-group representations on reaction time measure. In their research, however, they encountered two problems in clearly verifying the influence of social categories themselves. In our research, by (1) adopting the minimal group experiment and (2) clarifying intergroup context, we have made it possible to see how the social categories of in-group and out-group themselves prescribe social self-concept. Results showed that social self-concept is prescribed through identification with self-representation and in-group representation, but not through the relationship between self-representation and out-group representation. The results shed light on the relationship between social self-concept and intergroup context.

**Key words** : cognitive representation, reaction time, minimal group experiment, stroop effect, in-group.